新陳代謝を「町経営」の象徴に

辻本真宏大淀町長に聞く

辻本真宏大淀町長

大淀町長選で、16年間にわたる無投票に風穴を空け、さらに従来型選挙戦に終止符を打った辻本真宏町長（52）。1万6000人余の人口を抱える同町は、吉野郡の核になる町だが、人口減少と少子高齢化に直面し、将来を見据えた計画的・効率的な町政運営が求められている。辻本町長は「公正さ」を強調する。選挙の低投票率で見えてきたのは「もの言わぬ多数」（サイレントマジョリティー）の民意を見極めていく度量。財政もひっ迫する中で今後、「町経営」に新陳代謝を描く辻本町長に話を聞いた。

渦（仕事）の中心になり、積極的に周囲を巻き込む

―初当選おめでとうございます。初登庁から1カ月経ちますが、執務にあたられた感想を。

私は長く職員でしたので、溶け込むように自然な感じで執務をさせていただいています。それと、仕事を通して共有してきた仲間が役場の幹部はじめ中堅、若手に至るまでいて、ほとんど知らない職員はいません。

だから、そういうコミュニケーションとか、それぞれの持ち味というものもあらかじめ把握しています。障害なく、スムーズに業務は滑り出したと思っています。

―登庁日、職員の方にどのようなことを言われましたか。

私は、初めて就職した会社が京セラでしたので、ちょうどお亡くなりになった稲盛和夫さんのフィロソフィー（哲学）から、その一節である「渦の中心になれ」を例にとって示しました。

―「渦の中心になれ」とは。

大きく分けて二つの意味があるんです。仕事は自分一人でできない。上司とか、部下とか、また関係者の人たちと一緒に協力し合って渦のようにぐるぐるやっていくというのが一つ。もう一つは、仕事という渦があれば自分が渦の中心になり、積極的に周囲を巻き込んで取り組んでいかなければならない。そうでなくて渦の端でいると、仕事をしたという本当の意味での喜びというものは得ることができないんじゃないかな。

―これからの町政に生かされるということですね。

仕事をする上での礎、基礎にいつもありますね。そのへんは自己評価とかをすることではなくて、例えば辻本が町長になって3年後とか、5年後とかのある程度時間が経ってからになるでしょう。職員も新陳代謝して、その後の他者評価で周りから「良くなったよね」とか、内部的にも自分たちがしっかり頑張ってきた結果、いい組織ができたと思えるよう、頑張っていきたいと思います。

―他に稲盛さんのフィロソフィーの一節で何か。

そうですね。「入りを量（はか）りて出（い）ずるを為（な）す」。やはり行政も経営も当然ですけれども、この言葉のように、歳入の見通しをしっかりと持って、そして歳出をどうコントロールするかということを決めていくというのは、行政も経営も第一の基本だと思いますね。

―民間を経験なさったので「経営」という言葉がたびたび出ますが。

行政は運営というのが多いんですけど、運営に改善行動を加えることで、経営になるという面もあると思うんです。業務改善する意識というのを職員が持てば、組織としたら一歩、運営から1ランクも2ランクも上がって経営になるんではないかと思ってるんです。

そういう当たり前ですけど、人と人が絡み合った組織、アメーバがどう進化するか、どう形を変えるかというのが楽しみなんじゃないかなと思います。

―「集中と選択」という意味にも取れますが。

集中と選択というか、「新陳代謝」でしょうね。20年後になくなるような要らないもの、もうどうせなくなるんだからと、早めに手を打たないと。逆に20年後に「ああ、あの時しといたら」と思わないように、20年後に必要になる事業を、だんだん打ち出していく。これをやらないと、いつまでも運営であり、それこそ財政難であり、悪いスパイラルで、何もかも悪く回っていくでしょう。

子どもに「こんな町で大人になって生活したくない」と思われることがないように、そう常に思うんです。やっぱり何か人生の岐路に立った時、選択肢として親も友達もいる大淀に帰ろうとか、大淀の近くでもいいんですよ、別に。そんな町にしておきたいですね。

―そういう意味では、下市口駅周辺のまちづくり、大淀病院の跡地問題が気になるところです。県と結んだ連携協定が前を向いては進んでいないようですが。

着任したばかりですが、将来像が見えるような形で今一度、計画を見直す必要があるんじゃないかなあと思います。だから、令和5年度から見直し作業というものをやっていこうと思っています。今のままでは進むことはありません。

もともとの計画では、大淀病院の個別計画ですけど、保健センターを持ってるはずが、全然違って、こども園とかになってしまっている。もうすでに計画通りじゃないですし。

―子育て、教育の考え方は。

子育てであるとか、教育というのは、どこまでいっても行政の柱です。私は、大淀町だけが良くなったらいいという考え方が嫌いなんです。みんなWin―Winで良くなったね、と周辺も含めて言えるように、そんな施設になるように、ということを狙っているんです。

―これから町政を進める上で、最初に来年度の当初予算の組み立てが待っています。どのようなものをまず盛り込んでいかれますか。

やはりトータルで言うと、新陳代謝の一環である今のこども園を中心とした新施設の整備になるかと。子ども、子育てに力を入れていく1年目だと思います。ただ、新陳代謝、その新しいのができる裏側で、二つの幼稚園、一つの保育所があります。初めに二つの幼稚園が閉園になります。それも時代の流れ、新陳代謝です。そういったことだろうと思うんです。

そして、そういった子ども、子育て、というところに主眼を置きながら、もう一度来年度は今現在やる計画を見直していくという、そこからだろうなと思うんです。それなしに、このまま進むこともできませんので。

―町経営の象徴としては、やはり新陳代謝になるわけですね。

これからはやっぱり跡地問題とかね、公共の大きな空き家問題。あれだめですよ。行政は地面、区域を管轄しながら商売というか、経営していますんで。自分たちが土地の面積を殺してしまう、その周辺まで悪い影響を与えるのは絶対だめです。

だから、廃園となる2園の幼稚園であるとか、または機能として移管しようとしている中央公民館という生涯学習施設であるとか、いろんなものを壊しはするんだけれども、新たなものが生まれた時に、「前よりいいよね」「よくなったよね」と思えるようにしないと。そこをどう見せていくかというか、そこが大事なんだろうと思うんです。古いのを除却したり、古いものを排除したりしながら、新しいのを生み出していく。そういう新しい時代の幕開けのようにね。

こども園のイメージパース